

「やらされ探究」から「マイ探究」へ!

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Turning Point

探究学習における
コース間連携と
企業連携

他コースや企業との連携を通じて、
1年次から専門分野の課題意識を醸成。
様々な連携へのハードルも下げる
福井県立坂井高校

生徒の 転換点

- 他コースの授業の受講や合同発表会で、全コースの専門分野に触れる
- 1年次から地域企業と連携した授業や企業訪問研修などを実施

総合産業高校の強みと企業連携を 生かし、生徒に課題意識を醸成

4学科8コースを擁する県内最大規模の総合産業高校である福井県立坂井高校は2021年度、文部科学省「マイスター・ハイスクール」(*)の指定を機に探究学習のカリキュラムを見直した。進路支援部の永田卓裕先生は、その背景を次のように説明する。

「本校の探究学習は3年次の『課題研究』がメインですが、以前は1・2年次に学んだ専門知識や技術を生かす集大成の機会という位置づけで作品製作などに取り組んでいたため、生徒の課題意識に基づいた活動にはなりにくい面がありました。また、生徒は教師の指導に沿っ

て取り組む、受け身の活動になりがちでした」

そこで、他コースの学びや地域企業の課題などに触れる機会を1年次からカリキュラムに組み込み、生徒が気になる課題を見いだせたり、専門外の分野にも目を向けられたりするようにした。具体的には、1年次の必修科目として全コースに学校設定科目「ふくいの産業」を設置。県の主要産業を紹介する動画の視聴や、各コースの教師が他コースで授業を行う「コース間授業」、各コースの専門分野の関連企業などによる出前授業を実施している(図1)。

出前授業は教師と企業等の外部講師が協働で設計し、探究的な学びを通じて生徒が所属コースに関する課題意識を持てるように工夫している。例えば農業コースでは、農業法人



進路支援部コンソーシアム事務局長
永田卓裕
ながた・たくひろ
同校に赴任して1年目。英語科。



進路支援部コンソーシアム事務局
早見佳明
はやみ・よしあき
同校に赴任して5年目。農業科。

学校概要

設立 2014(平成26)年
形態 全日制/食農科学科・機械・自動車科・電気・情報システム科・ビジネス・生活デザイン科/共学
生徒数 1学年約230人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、福井県立大に3人が合格。私立大は、金沢工業大、仁愛大、福井工業大、身延山大、東海学院大などに延べ19人が合格。短大・専門学校進学54人。就職118人。

が生徒に「どんな作物を作りたいか」と問いかけ、生産規模や経費等を想定した農業経営について考える課題を出した。食農科学科の早見佳明先生は企業連携の意義をこう語る。

※プロフィールは、2026年3月時点のものです。

* 成長産業化に向けた革新を図る産業界と専門高校が一体となり、地域産業の持続的な成長をけん引する最先端の職業人材を育成する事業。同校は2023年度の指定終了後、24～25年度は当事業の普及促進事業の拠点校の指定を受けた。

図1 1年次に取り組む「ふくいの産業」の概要 (2025年度)

月	授業内容 (全コース共通)	
4	オリエンテーション	
5 ~ 12	コース間授業 (所属コース以外の授業の受講、2・3年生の授業や施設・設備の見学など)	福井県の産業に関するオンデマンド講座の受講 (県内企業の社長による企業紹介や技術紹介など)
1 ~ 3	企業や大学等から講師を招くプロジェクト型の出前授業	

生徒の声

「福井県立大学の教授による出前授業を通じて、福井の農業の未来や、日本の食料自給率を上げるための県の取り組みについて知ることができました。課題研究では、県内で生産していない農作物の栽培に挑戦したいと思っています」(農業コース1年)

「『ふくいの産業』の授業や企業訪問研修、合同研修会などに参加して、企業の方と協力する取り組みは本校だからこそできるのだと感じました。生徒と企業、企業と企業をつないで新しい事業を企画するような課題研究に取り組みたいです」(ビジネスコース1年)

図2 課題研究におけるコース間・地域・企業連携 (例)

坂井地域交流センター×生活デザインコース×情報システムコース	地元の野菜の売れ残りが課題だと、道の駅で働く人から聞き取った生活デザインコースの生徒が、野菜を使ったレシピを開発・紹介して拡販するアイデアを提案。売れ残りの野菜を判別する方法を情報システムコースの生徒に相談し、画像認識システムで野菜の種類を検知して、それに応じたお勧めのレシピをモニターに表示するシステムを開発した。
地元和菓子店×ビジネスコース×機械コース	地元の和菓子店が和菓子につける焼き印の製作を学校に依頼。ビジネスコースの生徒が和菓子店と相談して焼き印をデザインし、それを基に機械コースの生徒が焼きごてを製作。ほかに餅やバウムクーヘンなどの焼き印を、地元企業の依頼に応じて2コースが連携して製作している。
まちづくり協議会×食品コース	2021年度から、まちづくり協議会が地元酒造の酒粕を利用した商品開発を食品コースの生徒に依頼。クッキーやパウンドケーキなどのスイーツを、代々レシピを改良しながら開発している。2025年度は酒粕塩バターあんパンを開発し、「坂高マルシェ」で販売。
自動車ディーラー×自動車コース・自動車部	自動車コースと部活動の自動車部がバギーカーを製作してオフロードレースに参戦。自動車ディーラーがレース参戦のサポーターとして機材の調達や車両の運搬などを支援している。

3年次の課題研究の授業を全コースが水曜日に配置することで、他コースと連携しやすくしている。※図1・2ともに学校資料を基に編集部で作成。

失敗した経験や他コースの専門性などを課題研究に生かす

「企業の方の話を聞くと、生徒は仕事の内容や課題をよりリアルに受け止めるようですよ。生徒と企業が直接やり取りできるようにすれば、企業連携がより深まるのではないかと考え、生徒と企業の方のみで話す場を設けました。私はその様子を見守るようになっています」

3年次に取り組む課題研究の中間発表会(9月)や最終発表会(1月)は全コース合同で実施。同じコースの先輩や他コースの研究内容をを知る機会になるよう、中間発表会は2年生、最終発表会は1・2年生も参加している。

1・2年次の企業訪問研修も工夫している。1年次は有志の生徒が24年度設立の「坂井高校コンソーシアム」(企業や自治体、大学などの52機関が登録)の中から2つの企業を選んで訪問。2年次はコースごとに専門内外の企業を1社ずつ選んで訪問する。

それらの活動を通じて生徒に課題意識を醸成しつつ(図1:生徒の声)、2・3年次は各コースの専門に応じた課題研究に取り組む。例えば食品コースは、生徒が作った農作物や加工品を販売する「坂高マルシェ」(年6回)の店が課題だ。2年次は製造技術や店の運営方法などを学び、3年次は商品を製造・販売する。自分の思いだけでなく、味や作りやすさも

踏まえ、売れる商品を目指して試行錯誤する。

「ある生徒が新製品にあんどーナツを提案しましたが、製造工程の調整がうまくいかず、商品化できませんでした。その後、地域特産のアーモンドを使ったお菓子の開発と小学生向けの料理教室の依頼を地域から受けたその生徒は、新製品での失敗経験を糧に、小学生にも作りやすいお菓子を開発しました。課題が変わっても過去の経験を生かして取り組むその生徒の姿に成長を感じました」(早見先生)

他コースや地域と連携した課題研究も盛んだ(図2)。1・2年次の経験から、生徒は自分たちだけで問題を解決できなかったら、他コースや地域に積極的に協力を求める。

地域との連携はコンソーシアムの設立を機に一層深まっている。25年度はコンソーシアム合同研修会を2回実施。2回目には生徒が53人、教師が43人、コンソーシアムから34人が参加し、「次年度の課題研究発表会を最高の状態にするには？」をテーマに語り合った。

「生徒からは『大人に相談をしても、『無理だ』と言われると何もできない気持ちになる。まずは私たちの考えを受け入れてほしい』といった発言があり、立場や世代を超えてフラットに対話をする場をつくることの重要性を感じました。生徒と大人との対話を通じて双方の関係性を深め、生徒それぞれの興味・関心を基にしつつ、地域に貢献できる課題研究を追究していきたいと思えます」(永田先生)